2025 年度

国　　語

（1 期）

（答はすべて解答用紙に記入すること）

（時　間　50分）

番号		氏名	

清泉女学院中学校

〔一〕

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。（字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。）

石炭を燃料とした動力機構、すなわち蒸気機関の発明は、①自然に制約された「はこぶ」に飛躍的な革新をもたらした。十九世紀初頭、イギリスのスティーブンソンにより蒸気機関車が実用化されると、高速大量輸送を可能にする鉄道は世界中に広がり、日本では一八七二年、新橋―横浜間に最初の鉄道が開業した。

化石燃料がもたらした交通の革新は「travelからtourへ」というテーゼ※1に要約できる。「たび（旅）」の語源が「たべ（給べ）」すなわち食べ物を乞うことに由来し、「travel（旅）」が「trouble（厄介）」と同根とされることからも推察されるように、前近代、交通運輸はヒトが自らの身体的労苦をもって行う「厄介ごと」にほかならなかった。これを蒸気機関は、ヒトの労苦を必要としない快適な移動＝「tour（旅行）」に変えたのだ（「turn（回転）」と語源を同じくすると考えられるtourには「労苦」の意味は含まれない）。そうした中から現在の意味での「観光tourism」も成立するわけで、世界的に有名な観光ガイドブックのミシュランが、自動車タイヤメーカーであることも、その端的な現れといって良いだろう。

ここで、鉄道がもたらすものをあらためて整理してみたい。

鉄道と言う近代交通システムは、輸送力の大量化・高速化をもたらしたのみならず、移動する身体を大地から切断し、その知覚のめまぐるしく移り変わる風景に投入したことで、「パノラマ的」と称すべき新たな身体感覚を発生させた。馬の走りや河の流れでは体験しえない猛スピードを、人類は初めて経験したのだ。

この新知覚を、旅行者と大地の間の決定的な※2乖離として捉えることも可能だが、反面、圧縮された風景を瞬時に閲覧する体験は、大地や風景に対する新たな認識を可能にした。地域間の異同を発見し、その要因を探究する民俗学も、そのような近代固有の認識力をドライブ※3に飛躍したといってよい。柳田國男は疎開学童に向けて書いた『村と学童』（朝日新聞社、一九四五）において、「汽車の窓から見ていれば、誰にでもすぐわかるように、屋根の三角の角度は行く先々でかわっているが、それはたいていは屋根を葺く材料の違いに伴うもの……」と、学童が見聞するであろう車窓の変化を手がかりに郷土研究のポイントを説いている。車窓は、民俗学のファースト・レッスンとなるのだ。

一方、高速移動する密閉空間で乗客たちが一定時間密着する、という新たな対人関係も鉄道がもたらしたものだった。［A］前近代の船旅なら、「呉越同舟」の故事のように、船客は運命共同体であり、見知らぬ相手とも相応の時間をかけて親交を結んでいくことが可能だった。ところ

が、鉄道の乗客は、そのような時間もないままに目的地に到着し、にもかかわらず、その間は密着を余儀なくされるという②厄介な距離感にさいなまれることとなる。この解消のために、居眠り、読書など新たな移動の作法が発達したし（このことが携帯可能な文庫本サイズの出版を促した）、一方で、痴漢のような新たな犯罪も発生した。一時的で無名性の対人関係が、人々の振る舞いをさまざまに更新していったのだ。なお、鉄道網が未発達な地方出身の学生さんは、今でも満員電車で鉄道初期のような当惑を追体験しているらしい。ある愛媛県出身の女子学生は、進学先の関西で初めて満員電車を経験し、目の前に見知らぬオッサンの顔が存在することの恐怖を真剣に語ってくれた。

それだけではない。時間感覚も大きく更新された。前近代、旅する人や牛馬は、各々のペースで進めば良かった。［B］、鉄道はそうはいかない。開業当時は単線だった新橋―横浜間で、新橋を出る下り列車と、横浜を出る上り列車が同じ時間を共有しないことには、衝突などの事故を避けられない。鉄道は、すべての列車とレールが一つに結ばれた巨大なシステムであり、安全運行にとって時間の共有は必須なのだ。こうして、ときに「時計より正確」とも称される③日本の列車運行は、時間の均質化を推し進める一因となった。

空間の変容も重要である。当初、蒸気機関車が出す煙や火の粉の危険性から、鉄道は都市部への乗り入れを忌避※4されたが、やがて、その輸送力が都市を支えるインフラとなるに従い、駅は都市の玄関口として都市の中心に位置付けられる。また、列車という運動体の性質から可能なかぎり直線的に敷設されることを良しとする鉄道は、都会と田舎とを問わず、その景観に直線的な構造物を出現させることとなった。

そして、鉄路で結ばれた地域のネットワークは、国土の一体性をより強固に実体化させることとなった。個人的な体験で恐縮だが、思い起こすのは、一九八八年、青函トンネルが開業した時のこと。このとき初めて、札幌駅に「上野」や「大阪」といった駅名が表示されるようになった。じっさいに列車に乗れたわけではないにもかかわらず、この地がそれらの地と確かに結ばれているのだと感慨④ひとしおだった。鉄路はそのような国土の想像を可能にするものでもある。

ミクロな身体からマクロな国土まで、鉄道は私たちの生活経験を様々な次元で刷新した、きわめてパワフルなメディアだったのだ。

◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆

化石燃料が切り拓いた「はこぶ」の革新は、その後も続く自動車、飛行機の発明改良とともにますます高速大量化し、交通ネットワークの網の目は地球全体を覆うこととなった。その気になれば一日程度で地球の反対側にまで到達可能な手段を、私たちは手に入れたのだ。グローバリゼーションの一面である。

ただ、それが何と引き換えに達成されたのかを、あらためて認識しておくべきだろう。

民俗学者・高取正男は「中間をカットした交通形態」を指摘した。交通機関が高速化するのと反比例して、「途中」に対する私たちの認識はいよいよ［　I　］化したのだ。特急の止まらない駅、新幹線の止まらない地域に対する認識のあやふやさを思うと、私たちの頭の中は確実に「中間をカット」されてしまっている。

それ以上に悩ましいのは、現代の巨大交通システムが、実のところどこまで私たちを自由にしたのか、という点だ。高取はいう。

☆

現代のドライバーは、いくら一匹オオカミを自認して旅に出ても、馬に乗って山野を※5跋渉するようなわけには行かない。通れる道は限られているし、高速道路に入れば、一定の速度で道路標識の指示するまま、次のインターチェンジまで、ひたすら走らなければならない。自動車に乗るということは、一見して自由な選択のようでありながら、結果的には近代の機械文明の一環に、より強く繋がれることをも意味している。おなじように、私たちは明治以来、外圧に抗して自ら近代をつくりだし、あるいはつくりだそうとつねに努力してきたと自負している。だが、私たちのなかには近代以前から持越してきたものがいっぱいあるうえ、自身でつくりだしたつもりの「近代」に飼育され、飼いならされていることも、率直に認めねばならない。

☆

高速、大量、安全、快適な移動を実現した現代の交通システムは、確かに便利なものだ。にもかかわらず、私たちは獲得した利便性によって、かえってその巨大なシステムに強く拘束されてもいる。そしてそのシステムは、自然災害等の要因により、唐突に大規模に停止しかねない代物なのだ。そのことは、東日本大震災で証明されたばかりである。

X

Ⅱ な巨大交通システムを手に入れた私たちは、自らが二足歩行する生き物であることを、あらためて考え直しても良いのかもしれない。

（菊地暁『民俗学入門』より一部改変）

※1　テーゼ…ある考えをまとめて表現・主張する文章のこと。
※2　乖離…結びつきがはなれること。
※3　ドライブ…ここでは強く前に進める力を持つもののこと。
※4　忌避…いやがること。
※5　跋渉…各地をめぐること。

問一　A ・ B に入る言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし、それぞれの記号は一度しか使えません。）

ア　なぜなら　　イ　ところが　　ウ　また　　エ　たとえば　　オ　だから

問二　――線①「自然に制約された「はこぶ」」とありますが、筆者は本文以外の箇所で自然に制約された「はこぶ」の一つとして身体の部位を使った「はこぶ」を次のように紹介しています。次の［　①　］～［　④　］は身体のどこの部位ですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

手　…片手で五本の指と手首、肘の関節により様々な微調整が可能となり、多様な形状の荷物を丁寧に運ぶことが可能になる。そのぶん重い荷物を長時間運ぶことには向かない。

［　①　］…重い荷物を長時間運ぶことが可能な部位。てんびん棒その他の用具を用いることで安定させたり一度に運ぶ量を増やしたりすることができる。

［　②　］…［　①　］と同様に重い荷物を長時間運ぶことが可能な部位。これも背負子などの用具を用いることで安定させたり一度に運ぶ量を増やしたりすることができる。

［　③　］…力学的に合理的な運搬スタイル。世界各地で行われ、女性的とされることが多い。安定して運ぶにはそれなりの習練が必要。

［　④　］…用具を用いることで軽めの荷物を運ぶことが可能な部位。手の動作域との近さから、採集したものをひとまず置く、作業用の道具を置く、等々、手の作業との関連で用いられることが多い。

ア　頭　　イ　顔　　ウ　口　　エ　首　　オ　肩　　カ　背中　　キ　腰　　ク　指　　ケ　足

問三　――線②「厄介な距離感」とありますが、これはどのようなことですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　従来の船旅では乗客同士が運命共同体であったため、お互いのことを知って協力する必要があったが、無事に目的地に着くことが保証されている鉄道では乗客は仲良くはならないということ。

イ　従来は鉄道網が未発達であったため、各々が好きなように移動し、振る舞いも自由であったが、鉄道網の発達によって、人々に共通の過ごし方が生まれ、お互いに一体感を持ちはじめたということ。

ウ　従来の移動手段では比較的広い空間が確保できたため、自身の空間を確保できたが、鉄道は狭い密閉空間であるため、見知らぬ他人が恐怖を覚え得るほど近い位置にいるということ。

エ　従来の船旅では初対面でも仲良くする必要があり労苦があったが、現在の鉄道での移動では、居眠りや読書などの新しい作法が発達したため、お互い快適な過ごし方ができる関係にあるということ。

オ　移動手段の高速化により、お互いのことを知る時間もないので仲良くなることもないという精神的には遠い関係でありながら、それに反して物理的にはとても近い場所にお互いいるということ。

問四　――線③「日本の列車運行は、時間の均質化を推し進める一因となった」とありますが、これはなぜですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　従来の移動手段を用いていた頃は、あらゆる人が自らのペースで移動することが可能であったため、時間を守るという感覚がほとんどなかったが、列車の運行によって人々が時間を守らねばならないという意識を共通して持つようになっていったから。

イ　従来は各々がそれぞれのペースで各々好きなように移動することが可能であったが、列車を安全に運行するためにはすべての人々が同じ時間を共有する必要があり、そのような列車の発達によって人々の時間に対する意識が変化していったから。

ウ　従来のゆっくりとした移動手段を用いた生活では、人々は自らのペースで落ち着いて行動することができていたが、高速な列車運行の発達の結果、時間を共有するようになったため、人々は他者とペースを合わせて行動せざるを得ないようになったから。

エ　従来の世界の列車は不正確な時間感覚のもと運行されていたが、日本の列車は安全のため正確な時間を共有して運行されていた点で優れており、他国の列車運行の模範となるものであったため、世界の時間のとらえ方を一新していくものであったから。

オ　従来の旅では牛や馬などを使ってゆっくりと移動していたので、時間の流れを体感することができていたが、列車での移動は高速であるため、自分たちのひたっている時間の流れについて考えを深める時間もないままに目的地に到着してしまうから。

問五　――線④「ひとしお」の意味としてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　雰囲気で内容をとらえるさま。　　イ　自分の感情を実感するさま。

ウ　頭を使って考え、理解するさま。　　エ　格別であると感じられるさま。

オ　事実と感情が一致しないさま。

問六　本文の☆から☆は高取の主張の引用です。筆者が高取の主張を引用したのはなぜですか。その理由としてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　筆者は本文において、鉄道の発達によって人類がどのような変容を遂げてきたかをさまざまな観点から説明しているが、乗用車の発達についても述べるべきことがあると考えており、それを示す引用を読ませることで、読者の注意を引き付けるため。

イ　筆者は本文において、移動技術の発達が人々にもたらすメリットのみを語ってきたが、実は移動技術の発達にはデメリットも数多く存在すると考えており、そのことを裏付ける証拠を見せることで、読者に自身の考えのたしかさを理解してもらうため。

ウ　筆者は本文において、蒸気機関の発明が人々に与える影響について論じてきたが、その中でも近代における蒸気機関の役割について述べる必要があると考えており、同じ考えを持つ者の文章を紹介することで、読者に自身の考えの重要性を理解させるため。

エ　筆者は本文において、化石燃料がもたらした交通の革新について述べてきたが、近代化に伴う交通システムの発展にも似たようなことが言えると考えており、その考えの根拠となる主張を示すことで、自らの考えに対する納得感を読者に与えるため。

オ　筆者は本文において、移動技術の発達がもたらしてきた恩恵などについて説明してきたが、その発達は恩恵をもたらすと同時に、人々を縛るものであるという考えを持っており、その考えを補強する具体例を提示することで、読者を納得させるため。

問七　［　Ⅰ　］・［　Ⅱ　］に当てはまる言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。後の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

［　Ⅰ　］

ア　具体　　イ　現実　　ウ　希薄　　エ　低速　　オ　詳細

［　Ⅱ　］

ア　強大だが曖昧　　イ　個人的だが社会的　　ウ　快適だが不安　　エ　高速だが不便　　オ　便利だが脆弱

問八　［　X　］には次のA～Fの文が入ります。正しい順番としてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A　翻って犬ぞりは、適切なペースで休息を取り、漁の獲物を食べさせている限り、無限に走行可能な、きわめて安定した移動手段となる。
B　ここで「エスキモーになった日本人」と称される大島育雄（一九四七～　）の移動術を紹介してみたい。
C　極限の自然環境のなかでは、人と犬が一体となった犬ぞりのほうが圧倒的に安全なのだ。
D　スノーモービルなどの現代的な移動手段もあるが、彼はそれを信頼しない。
E　探検家だった大島は、グリーンランドに暮らす狩猟採集民イヌイット（エスキモー）に感銘を受け、犬ぞりを操ってアザラシを獲るようになる。
F　極寒の極地で一たび故障すると、生命の危機に直結するからだ。

ア　A→C→B→D→E→F　　イ　E→B→D→C→F→A　　ウ　B→D→E→F→C→A
エ　B→E→D→F→A→C　　オ　E→A→B→D→F→C

問九　═══線「自らが二足歩行する生き物であることを、あらためて考え直しても良いのかもしれない」とありますが、ここで筆者はどのようなことを伝えようとしていますか。本文の◆以降の内容をふまえ、一〇〇字以内で説明しなさい。

〔二〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。）

塾講師から新聞記者に転職した私は、交通事故による大怪我で入院中の弟・亮二の子、なずなを預かることになった。周囲の温かい人々に見守られながら、生後三ヶ月の赤ん坊であるなずなを育てている。ある日、私は、近所の診療所に勤務する看護師・友栄から、なずなの集団予防接種の受け方について電話で聞いた。

なにからなにまで、お世話になりまして、と電話を切ろうとしたとき、なずなとふたたび目が合った。やっぱり、あれは笑みではないか？　目尻が下がり、口もとが逆にあがっている。ホー、ホハ、と彼女は声を出した。ホーホケキョの抑揚で、ホー、ホハ。①泣くときは、彼女が世界の重心になった。核からマントル、そして硬い地殻までも抜けて突きあげてくる泣き声は、極の磁力をも狂わせるほどだった。しかしこの表情はいったいなんだろう。地の底との関係を瞬時に断ち切って風船みたいにふわりとあがり、そのままはじける。部屋の空気がいっぺんに※弛緩し、なずなではなく、見ているこちらが小水を漏らしたかと思えるほど力が気持ちよく抜ける。これが笑みだとしたら、笑顔は、どうやらひとりだけのものではないらしい。なずなの笑みは、彼女自身の世界だけをなごませるのではなく、この私の世界をもゆるませる。涙に、笑み。このところの成長は、また、あまりにも急だ。写真を撮らなければと思いつつ、携帯を握りしめて、友栄さん、と私は呼んだ。びっくりするくらい、大きな声だった。

「もしもし、友栄さん、聞こえてますか」

「はい」

「あの、赤ん坊って、何ヶ月くらいで笑うんでしたっけ」

一瞬、間があった。

「個人差があるから、一概には言えませんけど、だいたい三ヶ月かな。二ヶ月で笑う子もいますよ。だいぶ前に点滴打ちに来た、あの優芽ちゃんて子、二週間でもうにたにたしてたって、お母さんが自慢してましたし。あ、じゃあ、笑ったんですか、なずなちゃんが？」

「ついさっき、笑ったような気がして」

「近くにいて、そういう気がしたんなら、まちがいないと思います」
「じゃあ、笑った、と見なしていいわけですね」
けらけらと、②友栄さんは明るい笑い声をあげた。そして、軽くむせた。距離が近くなって、息が、直接こちらの耳に入ってくるようだった。
「笑ったんなら、笑ったでいいんですよ」友栄さんは自身も笑いながら言った。「笑顔まで《見なす》なんて言い方しなくてもいいのに」
「ほかの赤ん坊の顔の変化を知らないものだから、ほんとに笑ってるのかどうか比較しようがないんですよ。じゃあ、笑ったことにします」
そうしてください、と③友栄さんはまた笑った。
「集団接種のときに、みんなの笑顔も見てくださいね。打たれたあとは、泣きますけど」
礼を言って電話を切り、湯を沸かし、顔を洗い、髭を剃り、また顔を洗って珈琲をドリップした。なずなと視線を交わしながら、一杯、二杯。穏やかな表情で、やはり声の出し方が複雑になっている。一音を長く伸ばしたあと、そこにぎくしゃくした装飾音が加わる。スティーヴ・レイシーのCDを流して、ご機嫌をうかがいながら何枚か写真を撮る。

（中略）

それから伊都川市の保健センターに電話をして、新川さんという人を呼んでもらい、友栄さんの名を出すと、はいはい、臨時のお父様の件ですねと、なずなではなく私の予防接種であるかのような応対ではあったが、話は無事に通じた。
なずなはご機嫌である。手を握って、ちょっと振ってやると、声の質がまた変わり、私に話しかけているようにも聞こえる。頬に触り、手に触り、鼻をちょんと押してみる。お母さんも、おじいちゃんも、頑張ってるぞ、それからお父さんも。話をしているうち、彼女は丸い口を開けた。泣くのではなく、口を開けて、なにかを食べたそうにしている。これがミルクの要求なのかどうか、判断がつかなかったが、先んじて準備をはじめていると、期待どおりの泣き声が背中から徐々に迫ってきた。もう動じない。作り出しているのだから、いつもより時間は短縮できる。手早く用意し、抱きあげて、すでに開いている口に哺乳瓶を近づけてやると、硬いプラスチックの本体が凹むのではないかという勢いで飲む。どんどん吸い、どんどん飲む。人肌の温度より高めになっても、彼女は気にせず飲むようになった。そのあいだ、視線は自分の指先ではなく、ちょっと離れたところに向けられているようである。なずなのおなかがいっぱいになると、こちらまでいっぱいになった気がしてくるから不思議なものだ。ミルクが入っていくにつれて体温があがり、頭のてっぺんからおなじみのもわんとした、ミルクと汗の混じった、甘いにおいがのぼってくる。

ご満悦のなずなとしばらく向き合って、話しかけながら儀式だけ行う。念のための空気抜きだ。出なくても心配はしない。上ではなく、下のほうから空気が抜けることもあって、それにつられてか、大きなものも出てくる。爆裂はなかったが、おむつを替えてやると、表情がぐっと明るくなる。なずなは、生後三ヶ月を過ぎた赤ん坊である。女の子である。このふたつの条件を満たす存在は数限りなくあるのに、なずなは、なずなでしかない。せりでもはこべらでもなく、なずなでしかない。「私」とはなにか、「ぼく」とはなにかを考える思春期の悩みは、第三者に向けられることがないから、④かけがえのない存在、といった言い方はつねに閉じた響きをともなう。だから、親となった人々はみなどこか悟った顔になり、子のない人々にそれとない圧力をかけているように見えてしまう。しかし、そうではなかったのだ。いまになって、子どもたちと教室で読んださまざまな文章が胸に沁みてくる。

⑤ぼくが　ここに　いるとき
ほかの　どんなものも
ぼくに　かさなって
ここに　いることは　できない

短期間だけ受け持った塾の低学年クラスで、この、まど・みちおの、「ぼくが　ここに」と題された詩を読ませたことがあった。低学年という分類は、こういう言葉を前にしたとき、なんの意味も持たない。ハンドボールをやめてからようやくものごとを考えはじめた私には、これほどわずかな言葉で、これほど深甚なことを伝えてくれる世界のあることがまず驚きだった。そして、遅まきながら「詩」の発見に、心から感謝したいくらいだった。いつだったか、亮二にこの詩の話をすると、よほど熱が入っていたらしく、兄貴はさ、スポーツなんてやらずに、文学の勉強でもしてたほうがよかったんじゃないのか、と冷やかされたものだ。教える側の人間が、みずから選んだ教材の言葉の力に動揺していては、先に進みようがない。同僚は《存在論》なんて用語で哲学的な解説をしてくれたりしたのだが、私にはよく理解できなかった。「ぼくに　かさなって」という、その一行に参っただけだったから。それでも、いまだにこれは、暗唱できるごくわずかな詩のうちのひとつになっている。詩はつづく。

もしも　ゾウが　ここに　いるならば
そのゾウだけ
マメが　いるならば
その一つぶの　マメだけ
しか　ここに　いることは　できない

なずなを見ていると、この「マメが　いるならば」という一行を思い出す。マメのように小さな赤ん坊は、しかし、たったひと粒しかそこにいることができず、「かさなって」いることはできない。十年前の私は、これを「ぼく」が生きていることの大切さに思いをめぐらす、つまり、「ぼく」を出発点にした詩として読んでいた。ゾウやマメは、「ぼく」が思い悩んだ末にとらえた世界の構成員であって、どんなに重い価値があっても、「ぼく」は、まず自分を切り開いていかねばならなかったのだ、と考えていたのだ。

ああ　このちきゅうの　うえでは
こんなに　だいじに
まもられているのだ
どんなものが　どんなところに
いるときにも

その「いること」こそが
なににも　まして
すばらしいこと　として

人は、親になると同時に、「ぼく」や「わたし」より先に、子どもが「いること」を基準に世界を眺めるようになるのではないか。この子が、ここにいるとき、ほかのどんな子も、かさなって、いることは、できない。そしてそれは、ほかの子を排除するのではなく、同時にすべての「この子」を受け入れることでもある。マメのような赤ん坊がミルクを飲み、ご飯を食べてどんどん成長し、小さなゾウのようになっていく。そのとき、それをいとおしく思う自分さえ消えて、世界は世界だけで、たくさんのなずなを抱えたまま大きくなっていくのではないか。私は、なずなの父親ではなく、伯父さんにすぎない。それでも、この子が「こんなに　だいじに／まもられているのだ」と言いたくなるほどには、父親的な成長を遂げている、と思いたい。

（堀江敏幸『なずな』より一部改変）

※　弛緩…ゆるむこと。

問一　――線①「泣くときは、彼女が世界の重心になった」とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　泣いているなずなによって、これまで緊張していた私の心がおだやかなものとなり、なずなの成長の早さを感じて心が満たされるということ。

イ　泣いているなずなによって、予防接種の受け方の理解ではなく、なずなの機嫌の良しあしの素早い判断が大切だと思わされるということ。

ウ　泣いているなずなによって、愛するなずなの存在の大きさを自覚し、命を預かることの責任の重さについて考えさせられるということ。

エ　泣いているなずなによって、今すぐに世話をしなければ、互いの信頼関係がくずれてしまうのではないかと感じさせられるということ。

オ　泣いているなずなによって、他にどのようなことがあったとしても、なずなの面倒を見なければいけないという気持ちにさせられるということ。

問二　――線②「友栄さんは明るい笑い声をあげた」・――線③「友栄さんはまた笑った」とありますが、友栄さんの気持ちとしてもっともふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。（ただし、それぞれの記号は一度しか使えません。）

ア　なずなが笑ったことを認められないものの一生懸命に育児に取り組む私のことをいとおしく感じている。

イ　なずなが笑ったことにとまどいを隠しきれない私のことが面白くて仕方がないと感じている。

ウ　なずなが笑ったことに対しての私のとまどいの気持ちが表れた表現が、育児の場にそぐわなくておかしいと思っている。

エ　なずなが笑ったことを慎重に判断する私の真面目な人柄を感じ、ほほえましく思っている。

オ　なずなが笑ったことを素直に認められずに、育児に関して自信を持てない私を励まそうと奮い立っている。

問三　――線④「かけがえのない存在、といった言い方はつねに閉じた響(ひび)きをともなう」とありますが、なぜですか。理由としてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　人は思春期になると、自分と関わりのある世界においてのみ生きるようになるから。
イ　人は思春期になると、自分だけが他者について悩(なや)むようになるから。
ウ　人は思春期になると、自分自身よりも他者の存在が大きく感じられるようになるから。
エ　人は思春期になると、自分の存在の価値を軽んじるようになるから。
オ　人は思春期になると、自分自身だけを大切に思うようになるから。

問四　――線⑤「ぼくが　ここに　いるとき／ほかの　どんなものも／ぼくに　かさなって／ここに　いることは　できない」とありますが、どういうことですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　今ここに存在している自分自身の命の尊さを自ら認める必要があるということ。
イ　ぼくをふくむ地球上の命のすべては一つひとつが唯一(ゆいいつ)の存在であるということ。
ウ　ぼくがたった一人のかけがえのない存在であると他者に認められているということ。
エ　ぼくが存在していることの意味を他者によって否定されることは決してないということ。
オ　地球上のすべての生き物は互いの命のつながりを大切にしなければならないということ。

問五　なずなとの関わりを通して、自分と他者についての私の考えはどのように変化していますか。まど・みちおの詩「ぼくが　ここに」を参考に、八十字以内で説明しなさい。

問六　この文章の表現に関する説明としてふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア　余分な空気がおなかにたまることを防ぐ空気抜きという動作を「儀式」と表現することで、育児の作法にのっとってなずなを丁寧に育てる実直な私の人柄を表現している。

イ　なずなについて私が視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚を用いた表現をすることにより、私が身体全体を通してなずなという命の存在を受け入れていることを示している。

ウ　友栄さんの発言は「　」を使って表現されている一方でなずなの声をすべて「　」を使わずに表現することで、なずながマメのように小さな赤ん坊で人間として未成熟な存在であることを象徴している。

エ　私の気づきやなずなのしぐさに関して「ふわりと」「よほど」などの副詞を用いて表現することを通して、私の感情の高まりや思考の深まり、なずなのあるがままの存在のいとおしさを描いている。

オ　詩で「ちきゅう」と表現されているものを「世界」という言葉に置きかえて私の心情を描くことで、国や地域の差異にとらわれずに多くの人の尊厳を大切にしたいという私の願いを暗示している。

〔三〕 次の(1)、(2)にそれぞれ答えなさい。

(1) 次のことわざ・慣用句の□には色を表す言葉が入ります。□に当てはまる言葉をそれぞれ漢字一字で答えなさい。ただし、同じ色・漢字を二度以上使ってもかまいません。

① 紺屋(こうや)の□袴(ばかま)
② 朱(しゅ)に交われば□くなる
③ 隣(となり)の芝生(しばふ)は□い
④ □一点
⑤ 大□柱
⑥ □天の霹靂(へきれき)
⑦ □羽の矢が立つ

(2) 次の——部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

① おだやかな風に春のケハイを感じた。
② 志望校に合格できるよう、勉強にツトめる。
③ 高層ビルがリンリツしている景色に都会を感じる。
④ 生徒会長選挙に当選するためのフセキを打つ。
⑤ 旅行をするときには、常備薬を忘れないようにしよう。
⑥ 直ちに勉強をはじめないと宿題が終わらないだろう。
⑦ 私のことについて、とやかく言われる筋合いはない。
⑧ 式典にいらっしゃる校長先生の席を設ける。